OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中上級漢字教育システムの新しいコンセプトと教材の開発
Author(s)	西口, 光一
Citation	アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要. 1993, 16, p. 29-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25290
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中上級漢字教育システムの新しいコンセプトと教材の開発

西口光一

[キーワード]
漢字教育、リーディング、漢字語彙、連語、中上級の学習者

I. はじめに

漢字教育のあり方は日本語教育が始まって以来、絶えることなく議論されている問題である。アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは将来日本研究者あるいはビジネス、法律、ジャーナリズム等の各分野の日本専門家になる北米の大学院生及び大学卒業生に対して10カ月の集中的な中上級の日本語教育を行っているが、本センターでも漢字の教育のあり方に関しては長い間模索が続けられてきた。1990年9月には、従来から教師が感じていた組織的で効率的な漢字教育システム開発の必要性と、そのような漢字教育システムを求める学習者の強い要望を受けて、本格的な漢字教育システムの開発に向けての研究とそれに続く教材開発がスタートした。1990年度の実験的な漢字コースについては河野(1991)で紹介されている。その後本センターではさらに研究と開発を進め、本年9月には新しい漢字教育システムによる漢字指導を開始する。そこで本論では、我々がどのような認識のもとに、どのようなことを意図し、どのような原理によりこの新しい漢字教育システムを開発してきたかを紹介する。

II. 本センターでの漢字教育の位置づけ

1. 学生の漢字学習歴

本センターの入学資格の一つに、大学課程の日本語を2年以上勉強し

ていることという条件がある。学生の実際の日本語学習歴は3・4年という者が多く、日本への留学やJETプログラムや仕事での滞在期間中の自主的あるいは個人教授等による日本語学習等を含めると学習歴5年以上という学生もいる。いずれにせよ、日本語学習歴の長短があるにせよ、大部分の学生はいわゆる初級段階の正規の日本語教育を受けている。

北米の大学では初級段階の日本語の教育は通常大学課程の2年間、場合によってはさらに1年間の時間を使って行われる。そこでは、通常いわゆる基本文型・基礎的文法事項を中心に編まれた教科書が使用される。そして、漢字については、教科書の本文等で提示された学習漢字を一つずつ学習していくという形で指導されることが多い。学習漢字の選定や提出順序は、漢字学習の促進ということを考えて非常に意図的かつ組織的に行われている場合もあるが、かなりアドホックにしか行われていない場合もある。学習漢字は教科書で出てきた語彙とその用例の中で学習され、意味の理解と形の認識と読み方だけでなく書けるようになることも多くの場合要求される。学習漢字の教科書での語彙以外の読みや漢字語彙もあわせて指導されることもある。このような漢字学習のために教科書に付随する漢字練習帳や漢字学習シートが準備されることも多い。

さて、北米の大学での初級段階の漢字指導の状況は以上のようであるが、各大学の方針や学生自身の選択で、漢字を重点的に勉強した学生もいれば、それほど熱心に勉強しなかった学生もいる。学生はその後にさらに進んだ段階に進むわけであるが、北米の大学での3年生以上の日本語教育の内容は非常にまちまちで、いわゆる中級の教科書を使って指導が行われる場合もあれば、さまざまな中級の教科書から材料を抜粋して教材とする場合もあり、3年生の段階で「上級日本語読本」（板坂他著）に入る場合もある。また、新聞教材を主な教材にしたり、その他の生教材をとにかく読ませるというようなコースもあり、日本語の基礎学習が終わるとすぐに日本文学の講読に入るという学校もあ

る。そのような中での漢字の指導は、一冊の中級の教材を使用する場合はその中で学習漢字の選定と提出順序について特別な配慮がなされていて、漢字学習が比較的組織立った形で行われることもあると思われるが、それ以外の場合は教材で出てきた漢字を教師が適宜選んで学習漢字として、場合によっては補助教材等を適宜準備して学習者に与えて、勉強させるか、あるいは、漢字の学習については適当な参考書を紹介して、後は学習者の自主性に任せるといった方法がとられているようである。

中級段階以降になると、コースの学習とは別に自分で漢字の参考書を選んで自主的に漢字学習を進める学生も多い。何らかの理由で正規の日本語教育は受けられないが日本語の学習は継続したいという学習者の場合でも、参考書を手がかりとして漢字学習を続けている者が多い。

2．入学時の学生の漢字能力

このような学習条件で漢字を学習してきた本センターの学生はどのような漢字の知識・能力を既に身につけているのだろうか。

表音文字を使っている英語話者にとって、複雑な図形のようで、一つの文字にいくつも読み方がありそれが場合によって使い分けられ、また時には意味もいくつかある漢字は、初めて見た時は得体のしれない「悪魔の文字」に見えると言う。本センターの学生はそのような段階は十分に通り過ぎて、表意・表語文字である漢字についての基本的な認識を形成し、漢字の字体の構成や語構成等についてもある程度の認識をすでに形成している。

河野(1991)は、アンケートの結果として、本センターの学生の入学時の漢字知識の自己判定は、読める漢字が200字から1000字、書ける漢字が100字から800字であったと報告している。日本語教育では漢字の知識・能力がしばしばこのように漢字の数で論じられるが、何をもって「読める漢字」とし、何をもって「書ける漢字」とするのかが明確でないので、このような数字ではおおまかにしか漢字の習得状況を知るこ

とができない。また、そもそも漢字の知識・能力を示す指標として漢字の数を用いるのが適当かという疑問もある。

とは言え、筆者の解釈では、「読める漢字」というのは「(いろいろな漢字を漢字語彙の形で学習したがその中で)今現在漢字語彙の形で提示されて音声言語に変換することができる漢字」のことであろうと思われる。この場合、音声言語で誤った音を身につけている場合は、そのことが漢字の読みに反映して誤った読み方をしてしまう。また、主に漢字語彙の形で漢字の読み方と意味を学習して漢字を身につけているので、一つの漢字でも学習した漢字語彙以外の読み方や意味は知らないと考えていいだろう。それゆえ、同じ漢字でも別の読み方で読まれる熟語などはもちろん読めないし、同じ漢字でも別の意味で使われている場合はその意味が分からない。

次に、書き方については、「ある漢字を書くように指示された時に、それと認識できるような形で漢字を再生することができる」というのが「漢字が書ける」の意味であろう。「それと認識できるような形で」というのは、簡単に言うと「一応書けるけれども正確には書けない」ということである。入学時の本センターの学生と同様の漢字学習歴を持つ非漢字系の学習者で、個々の漢字を字体素の複合体であると認識し、字形の部品である字体素を正確に書くことができて、その複合体である個々の漢字を正確に再生できる者はさほど多くはない。

3．漢字教育の目的

そもそも学習者は何のために漢字を学習するのであろうか。本センターの学生について言えば、漢字学習の最大の目的は、漢字に関する知識・能力を身につけることによりリーディング能力 (reading proficiency) の向上をはかることである(注1)。

さて、一般的に漢字に関する知識・能力と言った場合、これまでは単に個々の漢字や漢字語彙の知識及びそれらの間に存在するシステムを指した。そして、漢字の指導は、漢字や漢字語彙などの言語要素の

学習とそれらの言語要素学習促進のためのシステムの理解を目標として行われ、リーディング能力との関連については、漢字や漢字語彙の知識が多ければ多いほどリーディングの能力は高くなるという程度にしか考えられていなかった。しかし、漢字の指導においてもう少しリーディング能力との関連を考慮し、それを指導に反映させれば、漢字の指導がその究極の目的であるリーディング能力の開発に一層効果的に寄与することができるようになるのではないだろうか。我々（本センター漢字チーム、筆者を含めて2名）はこのように考え、リーディング能力向上への寄与ということを新しい漢字教育システム開発の最も基本的なコンセプトとして位置づけた。

Ⅲ．リーディング能力の向上に寄与する漢字教育の方法

リーディング能力の向上に寄与する漢字指導の方法としてどのような工夫ができるかという点について、我々は次のように考えた。

1．漢字語彙を漢字教育システムの柱とする

漢字というのは表意・表語文字である。とは言っても漢字はそれだけでは実体を持たないものである。例えば、「人」という漢字はこれだけでは、「ひと」と読むのか、「にん」と読むのか、または「じん」と読むのか判断できない。また、その指すところは、哺乳類ヒト科の「人」なのか、「男の人」という語彙を構成する形態素の一つの「人」なのか、人間を数える時の序数詞の「人」なのか、または国民や民族を示す形態素の「人」なのか分からない。すなわち、「人」という漢字は、「人、犬、猿」、「男の人、女の人」、「10人、20人」、「アメリカ人、フランス人」というふうに漢字語彙になって初めて実体を持つのである。これまで行われてきた漢字教育のアプローチは、そのような抽象的な漢字というものを指導の基本とし、個々の漢字の意味や読み方及び書き方を教え、さらに漢字という言語要素を体系的に理解させると称して漢字の中に存在するシステムを教えたり、漢字を語構成の構成素として

指導したりするというものにとどまっていた。我々はこのようなアプローチこそが、漢字教育を言語運用能力から引き離し、それゆえ漢字教育を言語運用能力の向上にさほど寄与しない状況にしてしまった根本的原因であると考えた。学習漢字の選定と配列や漢字内のシステムの解明についての強いこだわりなども、このようなアプローチに基づいて出てくる一つの発想である。

このような漢字教育の伝統的なアプローチに対し、我々は実体のある漢字語彙というものを漢字教育の中核とすることを提案する。その根拠は二つある。一つは、先に述べたように漢字というものはそれ自体実体のあるものではなく、漢字語彙になって初めて実体を持つということである。このような実体のないものを学習の対象とするのはそもそも適当ではないと考える。漢字と漢字語彙の関係は、言語構造の場合の実際の言語運用から抽象化して要素化された文型・文法事項と実際の言語運用から抽象化しないで抽出された発話文型・談話文型の対比に対応するものであると思われる。Wilkins (1976) は、抽象的で要素的な存在である前者をシラバスの基本とすることの危険性を論じ、それらの事項を教授上の問題の一つとして包摂し得る、より高次の単位によるシラバスの設計方法を提案した(注2)。現在外国語教育ではコミュニカティブ・アプローチが広く行われているが、その根本的な理論的根拠とその発展のきっかけがWilkinsのこの議論にあるということを知る者は今では非常に少ない。詳しい議論は同書に譲るが、我々はWilkinsの主張を支持し、かつ漢字教育においても同様の議論が成り立つと考える。

さて、もう一つの理由は、システム構成面の問題である。つまり、漢字語彙を漢字教育システムの中心に据えることにより、その下位システムとして漢字があり、同レベルのシステムとして語構成や語彙の体系が存在し、そして上位レベルの事項として連語や漢字語彙の典型的な使用例というものがあるという漢字関連の知識のシステムを組織的

かつ総合的に捉えることができるのである。そして、そのように漢字の知識を捉えてこそ、リーディング能力の向上に寄与する漢字教育を行うことが可能になるのである。以下の教材作成上の工夫はここに言う上位レベルの事項と同レベルのシステムに関するものである。

2. 観念としてまとまりのある典型的な例文や慣用的な連語の中で漢字語彙を提示する

漢字語彙がすぐに使えるように学習者に記憶させるためには、漢字語彙の読み方と意味とともに、文全体の観念と漢字語彙の結びつき、前後の語彙の意味と漢字語彙の結びつき、前後の語彙との文法関係と漢字語彙との結びつき、などをあわせて記憶に貯蔵しておくのが有効であると考えられる。そのためには、観念としてまとまりのある典型的な例文や慣用的な連語の中で漢字語彙を学習させるのが有効であろうと思われる。

3. 語彙の慣用的な組み合わせの形で漢字語彙を提示する

「責任」「文句」「書類」などの漢字語彙は、「責任を果たす」「文句を言う」「書類を作成する」といった慣用的な表現を形成する。このような慣用的な表現はしばしばこの組み合わせで一つの語彙のように使われるもので、語彙能力の重要な部分をなすものである(注3)。それゆえ、このような慣用的表現はそのまま記憶に貯蔵し、漢字語彙もその中の要素として記憶するのが効果的であろうと思われる。

4. 文法的な事項も漢字語彙とあわせて学習する

例えば、動詞に関していうと、ある動詞が自動詞なのか他動詞なのか、またその動詞を使って文を構成する時、どのような補語が要求されるのかといったことは、語彙に訳語が与えられただけでは学習者にはなかなか分からない。また、類義語の使い分けなどもやはり訳語を知るだけでは学習者には理解できない。このような事項は学習者の日本語運用能力の発達のために非常に重要な事項であるにもかかわらず、中上級の日本語教育の中では学習内容として組織的に扱われることがほとんどなかった。

このような事項が日本語教育で組織的に扱われていないのは、それらが非常に離散的な事項であるために、指導すべきであるとは考えながらもその中に指導すべきシステムを組織的に認定できず、それゆえ結局構造を重視する伝統的なアプローチの中では指導事項としての位置を確立することができなかった、ということであろう。このことは、ここで論じている連語、慣用的表現、語彙の文法的側面、類義語及び語彙の指導に共通して言えることである。これらの指導事項は日本語教育の「陽のあたらない側面」として長い間放置されてきた。我々は中上級の日本語教育において、漢字教育という分野は、これまで組織的に扱われなかったこのような領域の内容を教育の中に取り込んでいくための考え得る一つの適当な分野であると考える。

5．語彙を拡充する

リーディング能力を向上させるためには語彙の拡充が不可欠である。漢字の指導においても語彙の拡充に配慮することができる。具体的には、一つの学習漢字について重要な漢字語彙を多く提示し、また長めの熟語や固有名詞等も積極的に提示する。また、各々の漢字語彙について、反意語や類義語、また語彙体系の中の関連語彙等を重複を厭わず提示し、学習者の語彙学習の便宜に供するなどの配慮が可能である。

Ⅳ．教材システムの開発

本節では話をより具体的にするために実際の教材システム開発の手続きを論じながら、教材システムの特徴を紹介することとする。

1．学習漢字の選定

学習漢字の内容として当初我々は常用漢字1945字を考えていた。しかし、基本語彙で実際にもしばしば使われる「誰」と、「賄賂」の「賂」の2字が常用漢字に含まれていなかったので、この2字を学習漢字に含めることとした。その結果、学習漢字として常用漢字に上記2字を加えた1947字をまず選定した。

次に、全体のシステム作りの一応の目安として、まずこの1947字を6つの水準に分けることとした。各水準に相当する日本語の学習段階、漢字選定の基準、選定された漢字の一般的な特質、及び選定された漢字数は以下の通りである。記述中の学生の能力については本センター入学時の学生の能力を示している。また、能力の記述の中で「代表的な漢字語彙」という言葉を使ったが、これは当該の漢字を含む漢字語彙の中で、学習者がその漢字に馴染みを持つ時の主なコンテクストになるものを言う。

第1水準（初級段階）

大部分の学生がその漢字が含まれる初級段階の基本的な漢字語彙を音声言語の形で理解でき、かつ、多くの学生がその漢字語彙を文字言語の形でも認識でき、またその漢字をそれと認識できる形で再生できるような漢字の集合。初級段階の基本的な漢字とでもいうべきもの。250字。

第2水準（ポスト初級段階）

大部分の学生がその漢字が含まれる初級段階のやや進んだ漢字語彙を文字言語の形で理解でき、かつ、多くの学生がその漢字語彙の大部分を文字言語の形でも認識でき、またその漢字の大部分をそれと認識できる形で再生できるような漢字の集合。第1水準と第2水準の漢字を合わせて、一般に言われる初級段階の漢字に概ね対応する。100字（累計350字）。

第3水準（中級段階）

多くの学生がその漢字が含まれる中級段階の代表的な漢字語彙のかなりの部分を音声言語として理解でき、かつ、その漢字語彙の多くを文字言語の形でも認識できるが、その漢字の一部しかそれと認識できる形で再生することができないような漢字の集合。一般に言われる中級段階の漢字の大部分と、それらの漢字と結合して中級段階の代表的な漢字語彙を構成する漢字を含む。850字（累計1200字）。

第4水準（上級段階）

多くの学生がその漢字が含まれる上級段階の代表的な漢字語彙の多くに馴染みがなく、また、その漢字語彙の大部分を文字言語の形で認識することもできず、その漢字の大部分を再生することもできないような漢字の集合。

第3水準の漢字の一部と第4水準の漢字を合わせて、上級段階の漢字を構成する。220字（累計1420字）。

第5水準（超上級段階）

大部分の学生がその漢字が含まれる超上級の代表的な漢字語彙の大部分に馴染みがなく、またその漢字語彙を認識したり、その漢字を再生したりすることもできないような漢字の集合。超上級の漢字を構成する。415字（累計1835字）。

第6水準（専門段階）

特殊な分野の特殊な漢字語彙でしか使用されない漢字で、大部分の学生にとってほとんど馴染みがなく、特殊な必要のある学生以外必要とも思われない漢字の集合。112字（累計1947字）。

この選定基準を見れば分かるように、学習漢字の選定にあたっては、一般的な漢字の学習段階ではなく、本センターの学生の漢字語彙および漢字能力の発達段階とでも言うべきものを選定の基準とした。具体的な作業としては、上述のような水準を念頭に置いて、主として参考資料1と参考資料2及び参考資料3を参考に本センター漢字チームにより各水準の学習漢字がおおむね選定され、境界線上の事項については他の教師の意見も聴取しながら最終的に各水準の学習漢字が決定された。

2．各水準の学習漢字の必要性

このようにして選定された漢字を学生にとっての必要性という観点から見てみると、上級あるいは超上級の学習段階まで進む学習者の場合でも共通に必要と思われるのは第3水準あたりまでで、第4水準以上のものは共通には必要ではないのではないかと思われる。漢字の項目が完全に重複しているわけではないので確かな資料とはならないが、「現代新聞の漢字」（参考資料4）では使用順位1181番、「現代雑誌90種の用字用語」（参考資料5）では同1338番が使用率0.1パーミルの境界となっている。つまり、使用順位がそれ以下の漢字は漢字1万字の中で1回しか出現しないというわけである。この資料は上記の考え方を支持する

一つの証拠となろう。ただし、第4水準の漢字は決して特別の興味分野や特殊な話題のディスコースだけで使われるものではなく、一般的なディスコースで出現するものであるように思われる。

これに対し、第5水準の漢字をながめてみると、どちらかというと特別の興味分野や特殊な話題のディスコースだけで使われる漢字が大部分であるように思われる。それゆえ、第5水準の漢字については、全ての学生に共通に必要であるとは考えられず、個々の学生が必要や興味に応じて漢字を適当に選んで学習していくだけでよいと思われる。

最後の第6水準の漢字は、明らかに特殊な分野・話題のディスコースだけで使われる漢字である。これらの漢字は非常に特殊なニーズや興味のある学生以外には必要とは考えられない。

3．学習漢字の配列

第1水準と第2水準の漢字については、先に述べた学生の能力を前提として、語彙体系を意識しながら、一つひとつの学習漢字とその代表的な漢字語彙の知識を確実なものにしてほしいと考えた。そこで、第1水準と第2水準では、代表的な漢字語彙の基本度を第一の基準とし、漢字語彙の語彙体系を二次的な基準として学習漢字を配列した。

第3水準の漢字については、簡単に言うと、学生は代表的な漢字語彙を音声言語としてはかなりのものを理解できるが、文字言語としてはそれほどでもなく、また個々の漢字については一部のものを除いてはまだ書くことができない、というのが入学時の状況である。そこで、第3水準では、代表的な漢字語彙についての学生の親しみ度(familiarity)と漢字の字形の難易度を配列の主たる基準とし、漢字語彙と字形の組織的な理解と習得の促進を意図して代表的な漢字語彙の語彙体系と字形の共通性と類似性を副次的な基準として、学習漢字を配列した。

第4水準の漢字については、前節で述べたように、全ての学生に必要であるかどうか疑問である。しかし、とりあえず学習の便宜のために配列を決定することとした。我々は漢字学習の適正な前提条件をその

漢字を含む代表的な漢字語彙にある程度馴染みがあることと考えている。その条件が満たされるという前提の上で、第4水準の漢字についても、第3水準の場合と同様の方法で学習漢字を配列した。実際にも、学生は入学時には第4水準の漢字にあまり馴染みがないが、本センターで中上級の日本語学習を進め、その中で新しい漢字語彙に接しそれを適宜学習するうちに、第4水準の漢字に対する親しみ度が増し、上述の前提条件がおおむね形成されるという状況はある。

第5水準と第6水準の漢字についてはその必要性が前節で述べたような事情なので、特に意味のある形で配列する必要が認められない。それゆえ、現在のところとりあえず選定されたリストのままになっている。

以上のような方針で作成された学習漢字のリストが資料1である。

4．漢字語彙の選定

学習漢字のリストができたら、次にリストの各事項について、主として参考資料1、参考資料6、及び参考資料7を参考にして学習漢字語彙を選定した。漢字語彙は、参考資料7の日本語能力試験2級の主たる漢字語彙4833語をおおむね必須のものとし、同1級の7800語をおおむね越えない範囲で選定した。Ⅲの1で述べたように、今回の漢字教育教材システムの中核は、リストされた学習漢字ではなく、この漢字語彙である。

5．漢字参考書とワークシート

漢字参考書とワークシートは詳細な方針に基づいて作成されている。ここでそのすべてを述べることはできないので概略のみ紹介することとする。

まず、学習漢字を決定された配列で提示し、各々の学習漢字のもとに、読み方と英訳を添えた漢字語彙を配列し、さらに常用漢字表の読みを添えて、漢字参考書が作成された（資料2）。漢字語彙の配列にあたっては、学習者が当該学習漢字の意味や読み方のシステムが帰納的に理解・習得できるように配慮した。上位水準の漢字が含まれる熟語にはその上位の漢字の水準番号を、また同水準でも未出の漢字が含まれる熟語には「＊」印を各々付した。さらに、語彙としての難易度が当

該の日本語学習水準を越えると思われるものにも、やはりその認定された水準番号を付した。

漢字参考書の他に、参考書の漢字語彙についてⅢの2から5の方針に従って学習材料が準備され、それらが盛り込まれたワークシートが作成された(資料3)。ワークシートは、第1水準と第2水準については漢字約20字ごとに、第3水準と第4水準については約10字ごとに作成され、学習目標の漢字語彙には下線が付されている。

参考書でもワークシートでもさまざまな情報が重複を厭わず繰り返し提示されている。また、ワークシートでは、学習の妨げにならないと判断される範囲で未提出の漢字や漢字語彙も振り仮名を添えて使用されており、既出の漢字や漢字語彙でも読み方が難しいと判断される場合は振り仮名をつけて提示した。これは次節で説明するように、要素積み上げ型の教材よりもむしろリソース型の教材にすることを意図したからである。

Ⅴ. 学習目標と漢字参考書・ワークシートの活用方法

本システムの教材を使った基本的な学習の手続きとしては、

① 参考書を一通り学習する。
② 必要に応じて参考書を参照しながら、ワークシートのⅠとⅡを学習し、提示されたコンテクストの中で学習漢字語彙を身につける。
③ ワークシートのⅢの部分を自分の力で学習して、答え合わせをし、まだ身についていない事項についてはさらに学習する。

のようなものを一応想定しているが、実際のところは教材の活用方法については全く学習者の自由でよいと考えている。要は、学習者が参考書とワークシートを学習資材(resource)として自分なりの学習ストラテジーで学習を進め、所期の学習目標を達成すればよいのである。

また、学習目標としても、すべての学習漢字語彙について読み方と意味を完全に習得することを期待しているわけではなく、その一方で、

学習漢字語彙の読み方と意味の習得だけでなく、教材で提示されている関連の知識も意識的あるいは無意識的に習得されることを期待している。すなわち、学習ストラテジーとして、どちらかというと漢字語彙の読み方と意味の学習に重点を置く学習者もいるだろうし、連語や慣用表現や使用例文の学習に力を力を入れる学習者もいるだろうし、また、複合語や関連語彙の学習に力点を置く学習者もいるであろう。そして、その結果、当面の学習事項として同じ漢字語彙を学習していても、それぞれの学習者は質的に異なった能力を身につけることになろう。我々はこのような学習ストラテジーの多様性とその結果の多様性を積極的に受け入れ、それぞれのやり方で漢字学習を進めることを奨励するものである。本センターでこの漢字教材を使った漢字コースを実施する際には、ワークシートごとにクイズを実施する予定であるが、クイズは学習方法の自由を抑制するものにはせず、単に学習のペースを作るもの程度の機能として行いたいと考えている。すなわち、漢字の学習は何らかの形で継続する必要があると考えるが、どのようなことをどの程度までどのように学習するかは学習者自身で判断して自律的に学習してもらいたいと考えているのである。学習漢字の中の何番のものから学習を始め、どれくらいのペースで学習を進めるかも、言うまでもなく学習者の自主的判断に任せる。漢字参考書もワークシートもともにこのような自律的学習のための資材であり、まさにそのようなコンセプトで作成されている。

Ⅵ．おわりに

以上紹介してきた教材を使った漢字教育が本年９月から実施される。教育の実施と並行して、計量化できる教育効果は測定し、計量化できない教育効果や教育内容の妥当性等については学習主体である学生や学生の学習を見守る教師の意見やコメントを収集して、本教育システムの評価をしたいと考えている。その結果については稿を改めて報告したい。

注

（1） もちろんライティング能力に関心がないわけではないが、学生のニーズを考えるとリーディング能力の養成の方が圧倒的に重要である。卒業後すぐに、学生が日本語で研究論文を書いたり、同じく日本語でレポートを書いたりするということはほとんどない。

（2） Wilkins (1976) のpp. 1－20。

（3） 「日本語教育事典」(p. 310)。

参 考 資 料

（1） 外国人の日本語能力に関する調査研究協力者会議 (1982) 『外国人留学生の日本語能力の標準と測定（試案）に関する調査研究について』 文化庁文化部国語課

（2） 加納千恵子他 (1989) “Basic Kanji Book” 凡人社

（3） 豊田豊子 (1990) 『漢字の道』 凡人社

（4） 国立国語研究所 (1976) 『現代新聞の漢字』(報告56)

（5） 国立国語研究所 (1962) 『現代雑誌九十種の用語用字 (2) 漢字表』(報告22)

（6） 三省堂編修所編 (1991) 『新しい国語表記ハンドブック（第四版）』 三省堂

（7） 国際交流基金、(財) 日本国際教育教会 (1993) 『日本語能力試験出題基準』

（8） 国立国語研究所 (1984) 『日本語教育のための基本語彙調査』 秀英出版

（9） Hadamitzky, W. and Spahn, M. (1981) “KANJI AND KANA (漢字とかな)” Charles E. Tuttle

(10) 日本語教育学会編 (1982) 『日本語教育事典』 大修館

参 考 文 献

（1） Flaherty, M. (1991) “Do second－language learners process kanji in the same way as Japanese children？” 『世界の日本語教育』1 国際交流基金

（2） 羽田野洋子 (1992) 「漢字教育と語彙教育 (1)」『日本語と日本語教育』 慶応義塾大学日本語・日本文化センター

（3） 林 大 (1977) 文字を書く」『日本語教育』36号

（4） 今井幹夫 (1975) 「語彙指導としての漢字教育」『日本語教育』28号

(5) 石田敏子 (1984) 「国際化の中で漢字とは ―― 漢字の社会学 ―― 」 海保博之編『漢字を科学する』 有斐閣

(6) 石田敏子、仲野桂子 (1980) 「漢字の難易度その統計による判断と経験による判断」『日本語教育』42号

(7) 伊藤芳照 (1981) 「予備教育課程の漢字指導」『日本語学校論集』8号 東京外国語附属日本語学校

(8) R. M. ガニエ、L. J. ブリッグズ著、持留英世、持留初野共訳 (1986) 『カリキュラムと授業の構成』 北大路書房

(9) 海保博之、吉村弓子、岡野雅雄 (1985) 「漢字の機能度指数開発の試み」『計量国語学』第15巻 第1号

(10) 加納千恵子、清水百合 (1992) 「漢字力の測定・評価に関する一試案」『日本語教育論集』第7号 筑波大学留学生教育センター

(11) 加納千恵子、清水百合、竹中弘子、阿久津智、石井恵理子、海保博之、出口 毅 (1988) 「自由放出法による外国人の漢字知識の分析」『日本語教育論集』第4号 筑波大学留学生教育センター

(12) 加納千恵子、清水百合、竹中弘子、石井恵理子 (1987) 「『基本漢字』の選定」『日本語教育論集』第3号 筑波大学留学生教育センター

(13) 川口義一 (1989) 「漢字指導の新しい試み」『講座日本語教育』第24分冊 早稲田大学日本語研究教育センター

(14) 川瀬生郎 (1989) 「日本語教育における漢字」『漢字講座12漢字教育』 明治書院

(15) 木村宗男 他編 (1989) 『日本語教授法』 桜楓社

(16) 北條淳子 (1977) 「進んだ段階における漢字指導の問題」『講座日本語教育』第13分冊 早稲田大学語学教育研究所

(17) 国立国語研究所 (1988) 『日本語教育指導参考書14文字・表記の教育』 大蔵省印刷局

(18) 河野玉姫 (1991) 「中上級の学習者特に非漢字系学習者のための漢字教育」『紀要』14 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

(19) 河野玉姫、松本 隆 (1993) 「中上級日本語学習者の漢字学習方法に関する予備調査結果」『紀要』16 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

(20) 永保澄雄 (1969) 「漢字指導上の問題」『講座日本語教育』第5分冊 早稲田大学語学教育研究所

(21) Nattinger, J. R. and DeCarrico, J. S. (1992) "Lexical Phrases and Language Teaching." Oxford : Oxford University Press.

(22) 西口光一 (1990) 「上級日本語教育のプログラム――アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの場合」『日本語教育』71号 日本語教育学会

(23) 沼野一男 (1976) 『授業の設計入門』 国土社

(24) 岡野喜美子 (1992) 「非漢字系学生のための中級漢字・語彙教育」『講座日本語教育』第24分冊 早稲田大学日本語研究教育センター

(25) 柴田俊造 (1978) 「非漢字系学習者に対する上級漢字指導法」『講座日本語教育』第14分冊 早稲田大学語学教育研究所

(26) 志柿光浩 (1992) 「経済学専攻の非漢字系学習者にはどんな漢字を教えればよいか」『日本語教育』76号 日本語教育学会

(27) Scarcella, R. C. and Oxford, R. L. (1992) "The Tapestry of Language Learning." Boston : Heinle and Heinle.

(28) 清水百合、加納千恵子 (1992) 「CAIを利用した漢字学習」『日本語教育』78号 日本語教育学会

(29) 鈴木貞雄 (1985) 「日本語における漢字の学習について」『日本語と日本語教育』第2号 慶應義塾大学国際センター

(30) 武部良明 (1983) 「漢字の覚え方について」『講座日本語教育』第19分冊 早稲田大学語学教育研究所

(31) 武部良明 (1989) 『漢字の教え方』 アルク

(32) Wilikins, D. A. (1976) "Notional Syllabuses." Oxford : Oxford University Press.

(33) 吉村弓子 (1989)「漢字の指導」『講座 日本語と日本語教育』13 寺村秀夫編 明治書院

資　料

資料1　学習漢字　一覧表

＜第1水準＞　250字

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 百 千 万 円 人 日 月 火 水 木
金 土 曜 年 時 分 今 午 前 後 上 下 中 横 右 左 本 机 東 西
南 北 方 白 黒 赤 青 先 生 学 校 家 部 屋 店 駅 銀 行 会 社
電 車 自 動 転 道 男 女 子 主 奥 私 父 母 兄 弟 姉 妹 友 何
誰 名 高 安 新 古 大 小 長 短 朝 昼 夜 晩 夕 春 夏 秋 冬 山
川 石 田 多 少 明 暗 低 近 遠 強 弱 広 悪 重 軽 早 遅 暑 寒
深 浅 細 太 若 忙 寝 起 始 終 食 飲 来 帰 乗 降 作 休 見 勉
住 持 知 酒 茶 地 鉄 者 所 外 国 内 旅 語 英 世 界 倍 半 全
間 回 週 毎 体 頭 口 目 耳 手 足 心 力 立 座 歩 走 話 聞 読
書 借 貸 返 出 入 売 買 払 着 脱 働 泳 写 待 遊 呼 洗 使 歌
習 思 言 通 渡 送 泊 覚 忘 調 続 考 答 教 開 閉 止 焼 消 直
並 変 残 集 倒 郵 便 局 病 院 窓 雨 京 映 画 仕 事 質 問 料
理 真 好 元 気 静 利 親 切 有

＜第2水準＞　100字（累計 350字）

笑 泣 喜 困 怒 押 引 死 吹 急 咲 置 勝 選 飛 踏 進 盗 受 取
合 吸 拾 誘 疲 比 決 伝 流 落 晴 投 逃 過 捨 発 到 計 定 注
意 説 解 参 加 練 研 究 連 絡 濯 結 婚 運 案 卒 業 用 去 趣
味 授 橋 花 薬 色 服 客 犬 文 物 族 公 園 医 宿 題 寺 図 館
室 席 度 機 場 県 府 都 暖 涼 悲 苦 楽 辛 甘 正 痛 退 屈 同

＜第3水準＞　850字（累計 1200字）

平 和 等 第 筆 算 符 簡 単 戦 争 反 対 村 付 団 寸 支 技 術
街 封 筒 竹 替 賛 成 功 工 的 約 束 速 達 違 逆 整 務 省 談
相 想 首 身 員 損 別 特 点 無 然 当 予 野 原 因 幾 糸 紙 級

能 可 代 化 他 仏 位 供 共 以 性 不 必 要 価 値 普 昔 増 減
感 留 貿 易 量 裏 表 面 最 初 刀 号 労 協 門 関 係 孫 系 懸
態 池 湖 海 島 岸 岩 谷 林 森 空 天 星 光 風 虫 凡 冗 個 固
豆 登 祭 際 察 警 驚 敬 尊 導 停 件 牛 馬 魚 鳥 鳴 羊 群 毛
羽 翌 義 議 講 論 倫 輪 輸 較 効 果 郊 交 渉 干 汗 軒 形 枠
械 識 職 就 経 済 活 法 律 往 復 複 雑 誌 勤 難 漢 字 数 政
治 台 路 戸 居 民 守 宅 管 官 庁 庭 床 庫 廊 郎 市 区 町 丁
番 郡 州 欧 満 両 向 周 独 狭 肉 米 類 種 科 芸 草 芝 葉 荷
預 頼 顔 産 玉 宝 王 現 皇 聖 望 亡 未 末 申 神 存 在 禅 弾
丸 弓 矢 失 夫 妻 婦 姓 嫁 婿 娘 良 飾 飯 坂 皆 階 段 役 殺
設 施 備 準 率 演 絵 給 声 音 昨 暇 由 油 曲 農 濃 豊 富 典
興 己 記 紀 組 素 麦 責 任 信 徒 従 得 徳 聴 舟 船 般 航 億
憶 漫 慢 情 慣 快 適 敵 欠 次 姿 冷 句 旬 保 証 許 認 課 税
程 実 美 差 養 善 様 植 極 端 需 器 品 商 袋 製 制 誕 延 期
基 礎 疑 紹 介 招 委 季 節 即 企 歯 歳 歴 史 央 非 常 堂 党
賞 償 与 券 巻 角 負 敗 貝 具 散 故 放 敷 致 改 配 酔 針 録
緑 縁 納 絶 総 為 老 孝 才 材 財 貯 蓄 氏 底 抵 抗 接 換 条
契 喫 潔 清 士 志 恩 忠 恐 翻 訳 尺 釈 択 描 拝 提 拡 抜 振
打 折 採 菜 指 揮 輝 軍 隊 衛 防 坊 訪 妨 害 割 憲 毒 危 険
剣 検 験 騒 試 式 専 博 薄 夢 葬 蒸 確 権 観 視 規 則 側 測
例 列 殊 示 禁 宗 完 了 承 浮 乳 礼 祈 祖 査 助 努 収 状 将
奨 励 陸 陽 傷 湯 混 湿 温 泉 線 雪 雷 雲 霧 露 震 厚 宴 宣
各 格 資 源 貴 賃 貨 費 貧 乏 額 願 塾 熟 勢 熱 昭 照 黙 燃
灯 畑 災 灰 炭 鉱 精 請 育 絹 綿 織 編 縮 績 積 布 希 衣 依
報 告 吉 幸 福 祉 幅 副 判 断 継 繰 燥 乾 江 液 汚 染 港 湾
浜 沖 波 漁 鯨 鮮 洋 卸 御 缶 益 盛 盟 塩 監 督 皿 血 宮 営
辞 乱 求 救 球 儀 犠 牲 象 像 免 城 誠 詳 詩 討 謝 評 誤 誇
訓 順 序 秩 矛 盾 掃 除 余 途 込 辺 述 迫 造 追 師 桜 梅 松
桃 枝 株 根 限 眼 睡 眠 瞬 隣 舞 枚 杯 札 析 核 板 棒 柄 柱

構 再 黄 兵 靴 革 命 令 領 統 補 佐 臣 巨 拒 否 距 離 推 哲
掲 抱 包 均 射 占 況 祝 賀 競 景 影 響 郷 里 童 章 障 壁 卓
著 諸 緒 鏡 環 境 破 壊 激 攻 撃 襲 暴 爆 煙 犯 罪 逮 捕 担
批 刑 健 康 建 築 策 籍 筋 箱 範 困 雰 井 帯 帝 締 純 粋 迷
惑 域 越 超 赴 更 恵 恋 愛 互 涙 房 雇 肩 背 胸 腰 腹 豚 届
属 展 殿 凍 氷 永 久 及 幼 稚 移 秘 密 骨 胃 腸 肝 臓 脳 悩
蔵 倉 創 看 護 弁 念 息 応 寄 突 穴 容 欲 裕 浴 河 沿 沈 没
添 歓 迎 仰 卵 印 刷 刊 刻 劇 仮 版 片 皮 被 彼 徹 徴 微 妙
秒 砂 劣 勇 募 墓 幕 暮 漠 模 概 既 裁 我 武 輩 俳 優 仲 促
秀 似 傾 候 修 偏 遍 遇 遺 貢 献 僚 寮 帳 張 緊 繁 栄 挙 厳
派 閥 閣 衆 略 異 圧 至 票 標

＜第4水準＞ 220字（累計 1420字）

戻 丘 匹 司 詞 訂 訴 訟 譲 購 廷 処 拠 遣 還 逐 遂 塁 悔 慎
頻 項 販 贈 賄 賂 賢 堅 臨 幹 稿 稼 稲 穏 隠 隔 融 邸 隅 偶
僕 偉 俗 侵 伺 伸 倣 催 債 併 圏 宇 宙 抽 拍 摘 握 探 掘 堀
埋 排 拓 抑 拐 扱 撮 挑 兆 援 緩 丈 牧 畜 充 玄 豪 盲 帽 昇
曇 糧 糖 粧 臭 鼻 憩 舌 君 含 叫 奇 崎 峡 紅 繊 維 紛 紳 縦
索 累 畳 翼 裸 軌 載 軟 硬 柔 炊 冊 盤 盆 煮 署 罰 型 刺 削
剰 垂 華 兼 嫌 尋 寿 闘 娯 妊 娠 妥 威 戒 釣 鈴 鋼 鎖 鉛 銅
胴 腕 肺 胆 肌 飢 餓 飼 旨 脂 肪 肥 脈 肢 膨 枯 杉 彫 髪 珍
診 療 症 癖 避 恥 患 菌 荘 装 裂 鈍 鋭 克 児 旧 慮 寧 寛 寂
孤 触 踊 躍 焦 駐 循 衝 征 徐 斜 滑 潜 渇 沢 洪 津 浪 汁 渋
淡 滞 肯 齢 履 奮 奪 獲 穫 猫 薦 廃 庶 麻 摩 擦 邪 魔 魅 酸

＜第5水準＞ 410字（累計 1830字）

慶 啓 妄 汽 潮 掌 剤 陛 揚 浄 執 逸 惜 巡 傘 舎 誉 邦 陰 倹
狂 獄 窮 貫 彩 霜 棄 称 軸 捜 召 旋 旗 溝 伴 憂 勧 緯 塗 粗
阻 宜 舶 冒 帆 崩 栽 耕 墾 懇 繕 詰 鼓 抄 瓶 譜 霊 顕 傍 亭

囚 耗 錯 措 欄 潤 該 陥 弦 幻 幽 准 唯 腐 嘆 謹 吐 括 脅 膚
恒 垣 凶 刈 覧 胎 怠 隻 疫 壮 烈 炎 澄 滅 厄 縫 挟 伏 匠 憎
僧 層 悦 閲 荒 慌 班 審 雄 雌 紫 溶 誓 逝 暫 漸 斥 陣 陳 棟
懐 刃 忍 耐 懲 撤 膜 慕 悟 頂 舗 滴 縛 簿 絞 紋 雅 慨 涯 佳
掛 朴 笛 箇 径 怪 斉 弧 偽 宰 紺 某 謀 媒 搾 詐 欺 甚 勘 朱
珠 迭 伐 疎 擬 凝 碑 鬼 塊 魂 醜 磨 閑 菓 襟 奉 俸 奏 泰 漆
慈 磁 鋳 銘 顧 扇 扉 跳 眺 践 跡 虚 戯 虐 祥 猛 猟 狩 猶 衡
喚 呈 是 又 双 悠 愉 諭 愁 綱 剛 網 冠 慰 尼 泥 褐 濁 巧 朽
麗 覇 覆 託 嘱 愚 遭 槽 晶 唱 謡 揺 陶 挿 操 奔 噴 憤 叔 淑
享 郭 哀 衰 衷 喪 悼 貞 香 透 携 謙 廉 敢 摂 塁 粛 庸 粒 粉
糾 墨 粘 砕 酷 披 擁 窒 窃 控 扶 把 惨 尽 款 殻 穀 傑 敏 侮
唇 辱 髄 随 堕 惰 如 姻 朗 恨 縄 飽 砲 泡 遮 礁 諮 諾 匿 勲
薫 芳 騰 幣 弊 却 脚 鎮 窯 炉 沸 漬 弔 忌 迅 殉 拘 拙 塀 漏
賊 賦 禍 渦 痢 疾 痴 怖 憾 錬 鍛 錠 鉢 鐘 零 棺 彰 培 賠 剖
据 碁 棋 嬢 醸 塑 壇 塔 栓 俊 唆 頑 煩 頒 尚 硝 硫 紡 羅 罷
酌 酬 酵 酢 尾 尿 泌 蛮 駄 駆 篤 撲 俵 坪 斤 升 斗 桟 棚 壊
堪 抹 搭 喝 矯 偵 遵 劾 殴 陪 濫 胞 搬 賓 寡 附 浸 銃 架 酪
轄 漂 甲 乙 丙 肖 蛍 崇 滋 鑑

<第6水準> 117字（合計 1947字）

薪 菊 鶏 沼 樹 穂 洞 峰 峠 岳 岬 畔 浦 芽 茂 茎 瀬 巣 獣 猿
堤 潟 藻 暁 竜 滝 柳 桑 昆 蚕 渓 蛇 蚊 芋 [自然：34字]
奴 隷 妃 枢 銭 吏 弐 租 伯 藩 虜 殖 暦 尉 墳 艦 艇 唐 拷 壱
姫 賜 楼 陵 騎 勅 爵 侯 嫡 卑 侍 岐 還 隆 儒 坑 仁 塚 仙 孔
赦 后 亜 [歴史：43字]
婆 韻 叙 吟 詠 琴 妾 宵 [文学：8字]
嚇 但 恭 呉 斎 癒 凸 凹 厘 褒 丹 謄 詔 璽 畝 匁 勺 錘 銑 繭
嗣 謁 朕 脹 且 曹 翁 帥 屯 遜 虞 痘 [特殊：32字]

資料2　参考書

＜第3水準＞

平

平和　へいわ、peace
和平　わへい、peace, truce
平行　へいこう、parallel
水平　すいへい、horizontal
*不平　ふへい、complaint
平気な　へいきな、calm, indifferent
公平な　こうへいな、fair
*不公平な　ふこうへいな、unfair
平日　へいじつ、week days
*平等　びょうどう、equality
平らな　たいらな、flat
平社員　ひらしゃいん、ordinary employee, non－manegirial employee
文：平家物語　へいけ、Heike Monogatari, The Historic Romance of the Taira Family
ヘイ、ビョウ、たい（ら）、ひら

和

平和　へいわ、peace
和　わ、peace, harmony
和文　わぶん、Japanese script
*和風　わふう、Japanese style
*不和　ふわ、disharmony, discord
④和らげる　やわらげる、calm down
④和やかな　なごやかな、congenial
文：和尚　おしょう、Buddhist priest
歴：大和　やまと、(ancient) Japan
ワ、＊オ、やわ（らげる）、なご（やか）

等

平等　びょうどう、equality
同等の　どうとうの、equal
高等学校　こうとうがっこう、(senior) high school
④一等　いっとう、first class
上等な／の　じょうとうな/の、one of the best, fine, superior
等分　とうぶん、to divide into equal parts
④等しい　ひとしい、be equal to
トウ、ひと（しい）

第

第一に　だいいちに、first, first of all
第～　だい～、No.～, prefix for ordinals

第一人者　だいいちにんしゃ、most important person
第三者　だいさんしゃ、third person／party
*次第に　しだいに、gradually
④～次第　～しだい、as soon as ～；depending on～
④落第　らくだい、to get plucked
ダイ

筆

万年筆　まんねんひつ、fountain pen
④鉛筆　えんぴつ、pencil
筆　ふで、writing brush
自筆　じひつ、one's own handwriting
*筆記試験　ひっきしけん、written examination
ヒツ、ふで

算

計算　けいさん、to calculate, to compute
足し算　たしざん、addition
引き算　ひきざん、subtraction
暗算　あんざん、mental arismetic／calculation
*予算　よさん、budget
*算数　さんすう、arithmetic
④公算　こうさん、probability, likelihood
サン

符

切符　きっぷ、ticket
*音符　おんぷ、musical note
*符号　ふごう、mark, sign
フ

簡

簡単な　かんたんな、easy, brief
*簡潔な　かんけつな、concise
*簡素な　かんそな、plain and simple
*簡略な　かんりゃくな、simple, brief
書簡　しょかん、letter
カン

単

単語　たんご、word
単なる　たんなる、mere
単に　たんに、only, merely, simply
*単数　たんすう、singular　反　*複数　ふくすう、plural

*単位　　たんい、unit, denomination
*単独で　　たんどくで、by oneself
タン

戦

戦争　　せんそう、war
内戦　　ないせん、civil war
休戦　　きゅうせん、cease－fire
戦前　　せんぜん、prewar, before the war
戦後　　せんご、postwar, after the war
*第二次（世界）大戦　　だいにじ(せかい)たいせん、World War Ⅱ
戦う　　たたかう、fight
特：戦　　いくさ、war, battle
セン、いくさ、たたか（う）

争

戦争　　せんそう、war
言い争う　　いいあらそう、quarrel, argue
*論争　　ろんそう、argument, controversy
*争点　　そうてん、point of contention, issue
*争議　　そうぎ、dispute, strike
ソウ、あらそ（う）

反

反対　　はんたい、to object
*反省　　はんせい、to reflect upon
反日運動　　はんにち、anti－Japan movement
反発　　はんぱつ、to repulse, to repel, to oppose
*反面　　はんめん、on the other hand
④謀反　　むほん、rebellion
④反る　　そる、bend
④反らす　　そらす、bend
⑤反物　　たんもの、a roll of a cloth
ハン、*ホン、*タン、そ（る）、そ（らす）

対

反対　　はんたい、to object
対立　　たいりつ、to confront
対話　　たいわ、dialogue
～に対する　　～にたいする、toward ～
④一対の　　いっついの、a pair of
タイ、つい

村

資料3　学習シート

第1回（351－361）

Ⅰ．次の表現を勉強し、＿＿＿の言葉の読み方と意味を覚えなさい。

・平和を守る　・和平交渉
・議論が平行線をたどる　・公平な態度
・平気な顔　・平らな道
・人の和　・和文英訳
・和英辞典　・男女平等
・ＸとＹを同等に扱う　・ＸもＹも同等の扱いをする
・高等教育　・夏目漱石の自筆の原稿

Ⅱ．次の表現を勉強し、＿＿＿の言葉の読み方と意味を覚えなさい。

・戦争と平和　・管理職と平社員

Ⅲ．＿＿＿の言葉の読み方を書きなさい。

・戦争のない平和な世界をつくることは、世界中の人々の願いです。
・彼は入学試験に失敗しても平気な顔をしているが、実はとてもがっかりしている。
・管理職の大切な仕事は社員の間に和をつくることです。
・和文英訳は簡単ですが、英文和訳はむずかしいです。
・日本の会社で男女平等が実現されるのにはまだまだ時間がかかるだろう。
・この仕事の応募の条件は「大学卒業またはそれと同等の学力があること」です。
・「高校」は正式には「高等学校」と言います。しかし、「高等教育」というのは、大学

の教育のことです。

・ビジネスで成功するためにはまず第一(だいいち)にいい人を集めることです。

・ドナルド・キーンはアメリカの日本文学研究の第一人者(だいいちにんしゃ)です。

・第三者から見るとそれほどでもない人でも、好きになった人には素晴(すば)らしい人に見える。

・万年筆で書くと筆で書いたような字が書けますが、ボールペンでは書けません。

・何回計算しても計算が合わない。

・以前(いぜん)は暗算がよくできたが、電卓(でんたく)を使うようになって、暗算ができなくなってきた。

・電車の場合は「切符」と言いますが、映画やコンサートの場合は「チケット」と言います。

・大統領(だいとうりょう)からの書簡(しょかん)が首相(しゅしょう)に届(とど)いた。

・英語話者(えいごわしゃ)にとって日本語の単語を覚えることはとても大変だ。

・戦争している二つの国を休戦させることはむずかしいが、和平を実現(わへいをじつげん)することはもっとむずかしい。

・内戦で多くの人々が住む家を失(うしな)い、友(とも)を失った。

・戦前と戦後では、日本の社会はいろいろな面(めん)で大きく変化(へんか)しました。

・第二次世界大戦(だいにじせかいたいせん)で日本は米国(べいこく)と戦って敗(やぶ)れた。

・つまらない言い争いはやめて、仲良(なかよ)くやりましょう。

平	和	等	第	筆	算	符	簡	単	戦	争